

論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

| 報告番号 | ① 乙 第 号 | 論文提出者名 | 黒川誉志哉 |
|--------------|--|--------|-------|
| 論文審査 委員氏名 | 主査 長尾 徹 副査 有地 榮一郎 嶋崎 義浩 平場 勝成 | | |
| 論文題名 | 入院中の精神疾患患者の口腔の状態に関連 する因子の検討 | | |

インターネットの利用による公表用

本研究は、精神科病院慢性期病棟に入院中の患者を対象に精神疾患患者の口腔の状態の実態を明らかにすることを目的としている。内容は、①「精神疾患患者の病棟間における口腔の状態の比較」、②「統合失調症患者の口腔の状態に関連する因子の検討」から構成されている。

対象は、①では精神疾患患者 295 人(男性 165 人、女性 130 人、平均年齢：66.0 歳)とし、②では統合失調症患者 249 人(男性 144 人、女性 105 人、平均年齢：66.0 歳)である。

①の「精神疾患患者の病棟間における口腔の状態の比較」は、病態の異なる病棟(回復期病棟、一般病棟、慢性期病棟、寝たきり病棟)について病棟間で口腔の状態を比較した。口腔の状態の評価方法は、①、②共に Calculus Index (CI)、Debris Index (DI)、一人平均 DMF 歯数 (mean DMFT)、Revised Oral Assessment Guide (ROAG) で実施した。②の「統合失調症患者の口腔の状態に関連する因子の検討」は、クロルプロマジン換算量 (CPZE)、Barthel Index (BI)、年齢、歯磨きの頻度、口腔内セルフケア能力を検討項目とした。

本研究で得られた知見は以下の如くである。

①「精神疾患患者の病棟間における口腔の状態の比較」

1、精神疾患患者の口腔の状態が不良であることが示唆された。

精神疾患患者の口腔の状態は、DI は 1.7 (0.7-2.7) [中央値 (四分位範囲)]

で歯垢の中等度付着、ROAG は 9.0 (9.0-10.0) で口腔機能の中等度障害で

あった。mean DMFT は 24.0 (17.0-28.0) で本邦の同じ年齢層の健常成人と

比較し本研究結果は高値であったことから口腔の状態が不良であることが示唆された。

2、寝たきり病棟の歯磨き実施頻度は高いが、口腔衛生状態は不良であった。歯磨きの頻度は、寝たきり病棟：62人（78.5%）と全ての病棟間で最も毎日歯磨きを実施していた。口腔の状態を病棟間で比較すると、CIは寝たきり病棟では一般病棟に比べて有意に高かった（ $p<0.05$ ）。DIとmean DMFTは寝たきり病棟では他病棟と比べて有意に高かった（ $p<0.01$ ）。寝たきり病棟は、他病棟に比べADLが低下しているにも関わらず、患者の全身状態の低下を意識して口腔清掃の介入がされていることが示唆された。しかしながら、口腔清掃の実施者に清掃方法の十分な知識がないことや、患者の協力が得られない場合が多いことが口腔衛生状態の不良に関連したと考察している。

②「統合失調症患者の口腔の状態に関連する因子の検討」

1、入院中の統合失調症患者は口腔の状態が不良であることが示唆された。DIは1.7（0.7-2.5）で歯垢の中等度付着、ROAGは10.0（9.0-10.0）で口腔機能の中等度障害であった。mean DMFTは24.0（16.0-28.0）で本邦の同じ年齢層の健常成人と比較し本研究結果は高値であったことから口腔の状態が不良であることが示唆された。

2、「BI、年齢、性別、口腔内セルフケア能力」が口腔の状態に関連する因子として抽出された。

BIとDIは負の相関があり（ $r=-0.34$ 、 $p<0.01$ ）、mean DMFTは年齢と正の相

関を認め ($r=0.57$ 、 $p<0.01$)、ROAG は男性の方が女性に比べ有意に口腔の状態が悪い傾向 ($p=0.026$) であった。口腔内セルフケア能力は、「あり群」に比べ「なし群」は口腔の状態が不良の傾向にあった (CI ($p=0.017$)、DI ($p<0.001$)、mean DMFT ($p=0.002$))。以上から、高齢、男性、ADL が低く、口腔内セルフケア能力が低い患者は特に口腔の状態に注意が必要であるとしている。

本研究結果から、統合失調患者を含む精神疾患患者は、適切な口腔衛生が行えない患者がおり、早期から専門的口腔管理の介入を検討する必要がある。しかしながら、口腔清掃に専門的な知識を有するスタッフが常に介入することは困難であるため口腔の状態の悪化した精神疾患患者を早期に抽出し専門的知識をもったスタッフが素早く対応できる組織作りが重要である。従って、医療従事者は、精神疾患患者は歯の健康状態が悪いということを認識し、口腔清掃の知識の共有や歯科スタッフと連携がとりやすい環境の整備が必要であると述べている。

本研究で得られた知見は、精神疾患患者、統合失調症患者における口腔の状態不良に関する要因の理解と口腔管理に有益であり、口腔外科学ならびに関連諸学科に寄与するところが大きいと考え、博士(歯学)の学位授与に値するものと判定した。